

多収米品種におけるトビイロウンカとセジロウンカの発生の特徴

インディカ種由来の多収米品種におけるトビイロウンカとセジロウンカの発生は、主食用米品種に比べて多い。

農業研究センター 生産環境研究所 病害虫研究室 (担当者: 樋口聡志)

研究のねらい

近年、本県では多収米品種 (WCS, 飼料用, 加工用) の栽培面積が増加している。主食用米品種に比べて多収米品種の特徴は、栽培期間が長い、稲体が大い、多肥栽培などがあげられるが、これらのことはウンカ類の発生に影響を与える可能性がある。そこで、インディカ種由来の多収米品種におけるトビイロウンカおよびセジロウンカの発生の特徴を明らかにする。

研究の成果

1. インディカ種由来の多収米品種におけるトビイロウンカの発生は、主食用米品種に比べると、栽培期間が長い世代数が多くなりやすく、ピーク時密度が 1.2~18.0 倍と高くなりやすい (図 1 左)。
2. インディカ種由来の多収米品種におけるセジロウンカの発生は、主食用米品種に比べると、第 1 世代 (7 月) だけでなく第 2 世代 (8 月) も増加する場合があります、ピーク時密度が 5.6~14.1 倍と高い (図 1 右)。

普及上の留意点

1. 箱施薬剤を使用する場合、農業研究成果情報 No. 494 (平成 23 年 5 月) を参考にして薬剤を選択する。また、WCS の場合、「稲発酵粗飼料生産・給与技術マニュアル」 (http://www.maff.go.jp/j/chikusan/sinko/lin/l_siryo/ine_manual/index.html) も参考にする。
2. 本田防除を行う際には、病害虫防除所から公表されるウンカ類の飛来情報 (<http://www.jpnp.ne.jp/kumamoto>), 「稲発酵粗飼料生産・給与技術マニュアル」及び「飼料用米の生産・給与技術マニュアル」 (http://www.naro.affrc.go.jp/publicity_report/publication/pamphlet/tech-pamph/027981.html) を参考にする。

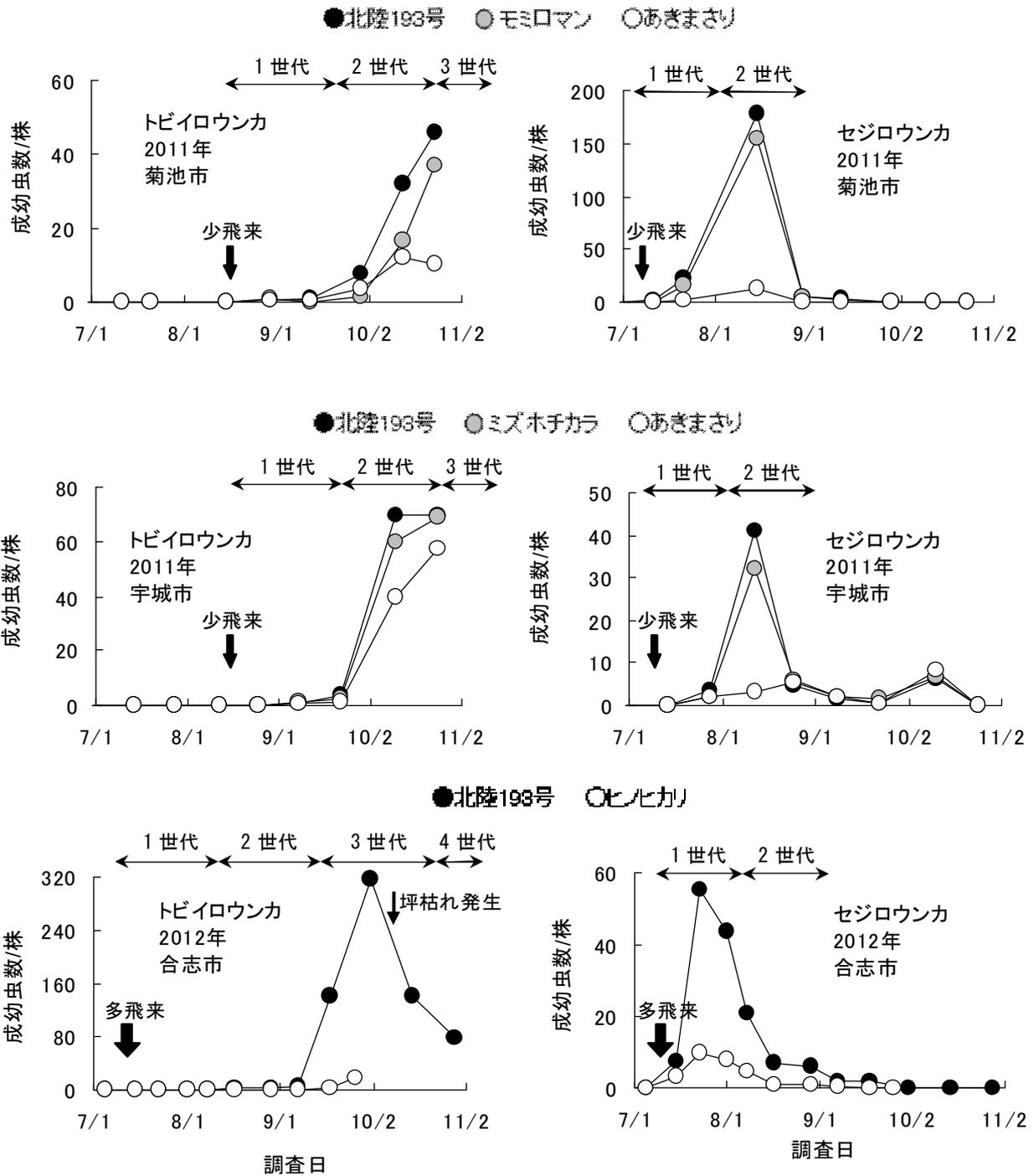


図1 多収米および主食用米品種におけるトビロウンカとセジロウンカの発生推移

多収米品種：北陸 193 号，ミズホチカラ，モミロマン

主食用米品種：あきまさり，ヒノヒカリ

移植日：菊池市 6/17，宇城市 6/15，合志市 6/21～22

試験圃場における薬剤防除を以下に示す。

【菊池市】箱施薬剤：フィプロニル粒剤，本田防除：8/17 フブプロフェジン水和剤，9/6 エトフェンプロックス乳剤

【宇城市】箱施薬剤：フィプロニル粒剤，本田防除：8/6 フブプロフェジン水和剤

【合志市】無防除

図中の世代数は、主飛来からの有効積算温度と払い落とし調査における幼虫の発育ステージ別（若・中・老齢）の割合から推定した。